

## 高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方

林谷 啓美・本庄 美香

### 緒 言

日本は、都市化がすすみ、核家族化や少子化に伴い、地域でのつながりが希薄になった。従来、家族内や地域で行われていた高齢者と子どもの交流は減少し、同一世代内のみで考え方を共有し、理解を深めるようになり、世代間のギャップが生じている。そして、子どもにとっては、多世代との交流が減少することにより、社会性を育む機会が失われている状況にある。高齢者においては、社会的な役割を担う機会が減少することにより、そのことが孤立化、生きがいの喪失となり、ひいては、QOLの低下につながっている。

こうした中、近年では、地域や施設における高齢者と子どもとの交流プログラムが検討され、実施されている。幼稚園・保育園に通っている幼児の8割が祖父母に好感をもっており、「一緒に遊びたい」「ご飯を食べたい、泊まりたい、お風呂に入りたいなど一緒に過ごしたい」とのぞんでいた<sup>1)</sup>。小学生においては、会話の多様性および接触回数が共感性に与える効果が明らかであり、高齢者とのコミュニケーションを通じて、小学生の共感性の発達が促進される<sup>2)</sup>。そして、8割以上の親が地域の高齢者と子どもが交流することについて賛同している<sup>2)</sup>。

幼稚園・保育所は、子どもと高齢者が触れ合うことにより、将来、「高齢者を大切にできる」「人のことを思いやることができる」などを期待していた<sup>1)</sup>。高齢者と子どもの交流が頻回に行われている複合施設での交流は、実の祖父母と接する場合に近い体験ができ、精神的な安らぎの場として、また文化が伝えられる場として、社会生活が身近に体験ができる場として貢献しているという研究結果もある<sup>2)</sup>。従来の施設における高齢者と子どもの交流については、運動会や七夕といった行事的なことが多かった。しかし、「幼児と高齢者双方に意義のある活動にすべきである」、「自然な形でふれあいが望ましい」、「イベント的は活動ではなく、継続することが大切である」という幼稚園・保育所の意見もある<sup>6)</sup>ことから、特別なことではなく、食事をする、おやつを食べる、遊ぶ、話をする、寝転ぶ、テレビを一緒にみるなど日々、生活の中でしているようなことをしながら高齢者と子どもが時間と場を共有し、くつろげるような交流が重要であると考えられる。

そこで、本研究では、高齢者と子どもの日常交流に関する文献を収集・分析し、文献から、高齢者と子どもの交流についての現状を明らかにし、日常交流のあり方とその課題について考察する。本研究の成果は、高齢者と子どもの日常交流が促進されるための基礎資料となる。

## 研究方法

1. CiNii、医学中央雑誌刊行会医中誌 Web 版（以下医学中央雑誌と称す）を用い、「高齢者」「子ども」「幼児」「幼老共生」「交流」「世代間交流」「ふれあい」「施設」をキーワードとして文献を検索する。期間は、2001 年から 2011 年までの 10 年間とし、原著、研究、報告を対象文献とした。なお、学会の会議録、特集、解説は除外した。
2. 収集された文献から、内容を整理し、高齢者と子どもの日常交流に関する現状を明らかにし、日常交流のあり方と課題について考察した。

### 用語の定義

日常交流：特別なことではなく、食事をする、おやつを食べる、遊ぶ、話をする、寝転ぶ、テレビを一緒にみるなど日々、生活の中でしているようなことをしながら高齢者と子どもが時間と場を共有し、くつろげるような交流のことをいう。

複合施設：幼稚園・保育所と老人福祉施設が併設または合築されている施設のことをいう。

子ども：幼児、小学生、中学生をこの論文の中では子どもとする。

## 結 果

### 1. 文献数の推移

CiNii、医学中央雑誌を用いて、「高齢者」「子ども」「幼児」「幼老共生」「交流」「世代間交流」「ふれあい」「施設」をキーワードとして検索した。本研究では、2001 年から 2011 年までの 10 年間の文献を対象とした。CiNii での検索結果、2001 年から 2011 年までの 10 年間ですべてのキーワードを含む文献は、23 件であった。医学中央雑誌における文献は、CiNii と重複している文献を除外すると、5 件であった。そのうち、高齢者と子どもの交流にまつわる調査研究に関する文献を検索した結果、12 件あった。また、高齢者と子どもの交流にまつわる実践研究に関する文献を検索した結果、11 件であったため、それらを対象文献とした。

表 1 によると、2001 年から 2011 年までの 10 年間において、2002 年と 2011 年を除いて、高齢者と子どもの交流に関する調査研究は、毎年 1 件～2 件あった。

また、表 2 によると、2001 年から 2011 年までの 10 年間において、2003 年から 2005 年を除いて、高齢者と子どもの交流に関する調査研究は、1～2 件あった。文献には、地域における交流と施設における交流があった。施設における研究協力者である高齢者については、デイケア・複合施設のデイサービスに通所しているものや老人保健施設に入所している高齢者などさまざまであった。

表1 年代別調査研究の内容

	研究協力者					
	高齢者	こども	保護者	職員	複合施設への ヒアリング・ 観察	幼稚園・ 保育所
2011						
2010	1					
2009	1	1	1	1		
2008	1				1	
2007						
2006						1
2005						1
2004				1		
2003		1		2		
2002						
2001	1		1	1		

表2 年代別実践研究について

	地域		老人福祉施設				老人保健施設 に入所して いる高齢 者と小学生
	地域の 高齢者と 小学生	地域の 高齢者と 幼児	デイケアに 通所する 高齢者と 小学生	複合施設に 通所する 高齢者と 幼児	複合施設に 通所する 高齢者と 小学生	複合施設に 通所する 高齢者と 中学生	
2011			1				
2010	1						
2009	1						
2008	1						
2007				2	1	1	
2006	1	1					
2005							
2004							
2003							
2002	1			1			
2001							1

2. 調査研究から見えてくる子どもの祖父母への意識交流

1) 幼児の祖父母に対する意識

幼稚園・保育園に通っている幼児の8割が祖父母に好感をもっており、「遊んでくれたり、お菓子を買ってくれたり、抱っこしてくれてうれしかった」ことを理由にしていた<sup>1)</sup>。また、8割の幼児が祖父母と「一緒に遊びたい」「ご飯を食べたい、泊まりたい、お風呂に入りたいなど一緒に過ごしたい」とのぞんでいた<sup>1)</sup>。

2) 小学生の祖父母に対する意識

小学生においては、高齢者との距離が近いほど交流が多く行われていた<sup>2)</sup>。そして、高齢者と

表3 高齢者と子どもの交流に関する調査研究

	テーマ	著者	文献名	調査内容
1	地域環境を支える人材としての高齢者の可能性：高齢者の児童との世代間交流の日常的な多寡が高齢者の地域における保育的ボランティアの引き受け意向に及ぼす影響	君島 菜葉	大正大学研究紀要. 人間学部・文学部 95, 2010	高齢者を対象とした質問紙法
2	高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 交流が子どもに及ぼす影響	村山 陽	社会心理学研究 25(1), 1-10, 2009	祖父母についての小学生 に対する質問紙調査
3	少子高齢社会における世代間交流の意義と課題：その2：幼老合築型施設 'みどりの福祉会' のアンケート調査を通して	下村 美保, 下村 一彦	山形短期大学紀要 41, 179-193, 2009	保育園児の保護者、デイ サービス利用者、管理職 以外の職員に対するアン ケート調査
4	超高齢時代における世代間交流の意義 - 関西学研都市高齢者の世代間交流に 関する調査から -	日下菜穂子	同志社女子大学 学術研究年報 59, 69-78, 2008	調査地域の老人クラブに 加入している在宅高齢者 に対する世代間交流に関 する質問紙調査
5	高齢者の役割作りとインタージェネレ ーションケアを行うための施設側の方 策：高齢者と地域の相互関係の構築に 関する研究	立松麻衣子	日本家政学会誌 59(7), 503-515, 2008	複合施設訪問によるヒア リング、観察調査
6	全国の幼稚園・保育所における幼児と 高齢者のふれあいに関する実態調査	關戸 啓子	川崎医療福祉学会誌 15(2), 655-663, 2006	幼稚園・保育所への質問 紙調査
7	世代間交流に関する調査研究 - 高齢者 福祉関係施設を併設している保育所の 側面から -	土永 典明, 岡崎 利治	九州保健福祉大学 研究紀要 6, 27-34, 2005	公立私立保育所質問紙調 査
8	子どもにとっての老人の役割 子どもと老人のふれあいに関わる保育 士のグループインタビュー分析から	川出富貴子, 鍵小野美和, 他	愛知医科大学 看護学部紀要 3, 33-40, 2004.	保育士に対する半構成的 面接法
9	子どもと老人ふれあい場面創出過程に おける老人に対する保育士の思いの変 容と園児の反応および変容要因	川出富貴子, 鍵小野美和, 他	愛知医科大学 看護学部紀要 2, 23-30, 2003.	保育士に対する半構成的 面接法
10	高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所 が抱く幼児の将来への期待：全国の幼 稚園・保育所へのアンケート調査結果 より	關戸 啓子	川崎医療福祉学会誌 13(1), 195-201, 2003	保育所幼稚園の幼児教育 や保育の専門家に対する 質問紙調査
11	子育てにおける祖父母世代の参加：幼 老共生の暮らしに向けての考察	日出幸昌江, 天富美禰子	大阪教育大学紀要. II, 社会科学・生活科学 51(2), 139-152, 2003- 02-28	幼稚園・保育園に通っ ている幼児に対する祖父母 についての面接調査
12	子どもと高齢者の交流に関する意識調 査	齊藤 徹, 黒澤 和隆	日本建築学会 技術報告集 (14), 229-232, 2001	高齢者、小学生、保護 者、教員、保育士へのヒ アリング調査

表 4 高齢者と子どもの交流に関する実践研究

	テーマ	著者	文献名	交流内容
13	子どもと要介護高齢者との交流が心臓自律神経活動に及ぼす影響－アクティブトレーサーを用いて	江渡 文, 大島 美沙, 他	医学と生物学 155(6), 390-395, 2011	しりとり、ぬりえ、おしゃべり、ゲーム、風船バレー
14	都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証：Mixed methodsによる高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて	亀井 智子, 糸井 和佳, 他	日本老年看護学会誌 14(1), 16-24, 2010	地域かるた、ちぎり絵等の共同制作、ゲーム、世代間交流書道等
15	世田谷区船橋地域「子どもぶんか村」の活動を通してみる世代間交流：子どもの側からみる大人との交流	秋山 展子, 天野 寛子	學苑 820, 15-21, 2009	ひまわりくらぶ、まち探検くらぶ、映像くらぶ、コーラスくらぶ、オーケストラくらぶ 他
16	子どもの共感性と三世代交流プログラムによる変化	日比野由利, 中村 裕之	思春期学 26(4), 2008	三世代ふれあい健診
17	世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究	上村 眞生, 岡花祈一郎, 他	幼年教育研究年報 29, 65-71, 2007	歌、手遊び、風船バレー、リースづくり、折り紙、うちわづくり、七夕の笹飾り、紙芝居
18	超高齢社会における世代間交流のあり方：長野市鬼無里地域での実践を通して	田中 慶子, 角間 陽子, 他	信州大学教育学部紀要 119, 147-156, 2007	1. 毎日30分間の交流、月ごとに季節を考慮した行事等 2. 念に数回の交流（歌、太鼓、ゲーム） 3. 一人暮らしの高齢者宅への訪問や高齢者と一緒に作業を行う、グループホーム訪問
19	都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS”の一年間の歩みと短期的効果	藤原 佳典, 渡辺 直紀, 他	日本公衆衛生雑誌 53(9), 702-714, 2006	読み聞かせ
20	歴史都市、津島に残る古井戸を活用した子どもと高齢者の交流を促すまちづくり（「住まい・まち学習」実践報告・論文）－（地域の学びづくりの取り組みから）	山口 友佳	「住まい・まち学習」 実践報告・論文集 (3), 75-80, 2002	古井戸の活用と町並み探検
21	複合型施設における高齢者とのふれあいが幼児にもたらす教育的意義	關戸 啓子	日本家政学会誌 53(7), 649-657, 2002	月に1回行う誕生日会、月に1回計画されている行事（夏祭り、もちつきなど季節の行事）、毎日午前中30～40分程度一緒に遊ぶ（パズルや折り紙）
22	施設入所要介護高齢者と小学校児童の交流会に関する検討	三宅 康弘, 武田 則昭, 他	四国公衆衛生学会 雑誌 46(1), 98-103, 2001	1回目：歌や笛の演奏、施設見学、握手、会話その後高齢者の理解 2回目はふれあい交流

の会話の多様性および接触回数が多いほど、親密感が高いことが示された<sup>2)</sup>。また、子どもの主観的親密感が共感性を高めるという結果があることから、小学生の共感性の発達は、高齢者とのコミュニケーションを通じて促進されることになる<sup>2)</sup>。そして、主観的親密感が高齢者イメージにポジティブな効果をもたらすことから、高齢者に対する心的な親密感を高めることが有意義な関係性の構築に重要である<sup>2)</sup>。そのためには、両者が交流する場所と十分な時間が確保され、その中でコミュニケーションを通じた交流をすることが必要であり、継続的で、自然にコミュニケーションが楽しめる交流の在り方が有効である<sup>2)</sup>。

### 3. 調査研究から見てくる高齢者と子どもの交流について

#### 1) 高齢者からみた高齢者と子どもの交流について

調査地域の老人クラブに加入している在宅高齢者に対する「高齢者の世代間交流に関するアンケート調査」によると、他世代との交流頻度の高い人ほど自世代にとっても他世代にとっても有益だと評価している<sup>4)</sup>。ただし、他世代に対する評価よりも自世代に対する評価のほうが高く、そのことから高齢者が世代間交流を通じて、他世代への貢献よりもむしろ自らに還元されるものがあると感じている<sup>4)</sup>。つまり、高齢者にとって、他世代との交流は、高齢者自身のためになることがあると考えている。また、今まで交流がないが交流をもちたい人が10%前後いた<sup>12)</sup>。そして、高齢者が考える世代間交流の動機には、「世代継承意識」「自己充足意識」「地域貢献意識」「世代理解意識」があった<sup>4)</sup>。多世代と世代間交流の動機は、孫との同居など多世代との交流によって高まる<sup>4)</sup>という結果がでており、さらに、親族との世代間交流のみ保育ボランティア引き受け意向に対する正の影響があるという<sup>1)</sup>。そして、身体的接触をともなう交流が多く行われる可能性の高い保育的ボランティアが、高齢者の生きがい対策としての有益なプログラムになる可能性があることが報告されている<sup>1)</sup>。

#### 2) 保護者の高齢者との交流に対する意識

幼児と地域の高齢者との交流には8割以上の保護者の賛同があり、内容は、伝承遊びや玩具作りをトップに、農作業への参加、地域歴史の学習など子どもへの地域特有の技術や文化の伝授が要望され、育児の代替はほとんど望まれていなかった<sup>11)</sup>。そして、幼児と高齢者の交流の利点は、幼児にとっては、「保護者が教えられないことを学べる」、「高齢者を大切にする」、「やさしさや温かさが身に付く」などであり、高齢者にとっては「生きがいになる」、「元気になる」などであった<sup>11)</sup>。さらに保護者にとっては「老いや死を考える機会になる」、「子育てに余裕ができる」などであり、高齢者、子どもとその保護者、三者にとって深い意義がある<sup>11)</sup>。

#### 3) 保育士の交流に対する認識

幼稚園・保育所への質問紙調査によると、幼児たちが高齢者とのふれあい（交流）の機会の頻度は、1～2回から数回という回答が多く、約75%を占めていた<sup>6)</sup>。そのふれあい（交流）は、幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が観賞するという形態がもっとも多く、ついで、幼児たちが訪ねてきた高齢者と一緒に遊ぶという形態が多かった<sup>6)</sup>。ふれあい（交流）に対する幼児の反応につ

いては、「普段よりうれしそうである」という回答がもっとも多く、ついで、「普段よりはしゃいでいる」、「緊張しているように見える」という回答が多かった<sup>6)</sup>。高齢者とのふれあい（交流）の今後について、幼稚園と保育所ともに「もっと増やしていきたい」という回答が最も多かった<sup>6)</sup>。その理由としては、「子どもたちは核家族の中で育ており、高齢者とのふれあい（交流）は重要である」であり、ついで、「高齢者が喜んでくれ、子どもたちも職員もやさしい気持ちになれるから」であった<sup>6)</sup>。現在のままでよいと回答したところは、「仕事が多くこれ以上の調整は無理で、職員の負担が大きすぎる」という理由があった<sup>6)</sup>。ふれあう（交流する）機会がないと回答した幼稚園と保育所の理由は、「高齢者施設が近くにないため」という回答が最も多く、ついで、「これまで考えたことがなかった」「職員の負担が大きいため」であった<sup>6)</sup>。幼稚園の半数と保育所の6割が「高齢者と触れ合う機会を設けるように考えたい」と回答した<sup>6)</sup>。そして、「幼児と高齢者双方に意義のある活動にすべきである」、「自然な形でふれあいが望ましい」「イベント的は活動ではなく、継続することが大切である」などの意見があり、幼児・高齢者ともに互いに相手に馴染めない人もおり、実践する際のむずかしさについて指摘があった<sup>6)</sup>。それとともに、高齢者の健康面についても憂慮する意見があり、幼児・高齢者双方に怪我があってもいけないという心配も述べられていた<sup>6)</sup>。

保育所が行っている活動内容は、「高齢者を保育所の行事に招待して交流する」、「相手先の行事等に訪問して交流する」が約70%で、双方が日常的に接触して交流するのは約30%であった<sup>7)</sup>。交流活動の実施による変化は、幼児では「高齢者への関心・理解が深まる」が約89%で最も多く、ついで「社会福祉への関心」が約39%であった<sup>7)</sup>。職員では、「高齢者への関心・理解が深まる」が約78%で、次に「社会福祉への関心」が約39%であった<sup>7)</sup>。また、「世代の考え方や文化を学ぶ」が約44%であった<sup>7)</sup>。

ほとんどの保育士が就任当時、高齢者について怖さや壁を感じていた<sup>9)</sup>。しかし、その思いは変化し、受け入れられるようになるが、保育士の高齢者に対する思いの変容要因として、①施設での研修、②施設長の話、③サポートティブな環境、④先輩の言動⑤他職員からの触発、⑥シェアリング・相互作用、⑦関わりの回数があった<sup>9)</sup>。そして、保育士が高齢者を怖いと思っているときには、子どもも怖くて保育士のそばを離れられないが、保育士が高齢者を普通に受け入れられると、子どもも普通に対応し、やさしさを示していた子どもの周りの親や保育士の高齢者への距離が、子どもと高齢者の距離に影響している<sup>9)</sup>。

保育所幼稚園の幼児教育や保育の専門家は、高齢者とふれあう（交流する）ことによって、将来に期待されるかどうかについて「期待できる」と多くの施設が回答した<sup>10)</sup>。項目は、「高齢者を大切にできるようになる」が約87%「人のことを思いやることができるようになる」が約78%「家族を大切にできるようになる」が約72%であった<sup>10)</sup>。

#### 4) 地域における交流について

高齢者、子ども、保護者、教員、保育士への調査によると、学校行事、児童館の高齢者福祉施設訪問や、公園での出会いなどが不足している交流機会を少しずつ広げているという結果があ

る<sup>12)</sup>。そして、交流の有無が地域社会への参加経験や参加希望の有無に反映している<sup>12)</sup>。注目すべきは、永住意識の高い、つまり、その土地に長く居住することを希望する保護者や高齢者は、子どもと高齢者のふれあい（交流）に積極的である<sup>12)</sup>ということである。また、小学生の50%が児童館に通っていること、高齢者の10～25%が老人クラブに会員として参加していることから、児童館と老人クラブの連携を視野にいたれた複合的な施設の再整備が望まれる<sup>12)</sup>。

#### 5) 複合施設における交流について

複合施設への訪問によるヒアリング、観察調査において、サービス形態としては、通所の場合は、就学前児童との交流が行いやすく、居住系サービスの場合は、比較的、時間の余裕があり、子どもとの交流が行いやすいという<sup>5)</sup>。複合施設では、お互いが自分の居場所とそこにいるべきメンバーを認識している会話がされており、高齢者と子どもの固定化したメンバーの関わりが、自然な関係性、さらにお互いを理解して思いやるような関係性を構築できる<sup>5)</sup>。交流内容については、「高齢者と子どもの関係性が構築されやすく、双方に効果的な交流は、日常的な生活交流がよい。すべての時間・行動を共有するのではなく、生活の一部をともにすることによって高齢者と子どもの良好で持続的な関係性が構築される<sup>5)</sup>。」という結果があった。また、合築のほうが日常交流を行いやすく、合築の中でも小規模施設にみられる一体型は、高齢者と子どもが行き来しやすく、自然な交流がうながされる<sup>5)</sup>という報告があった。

保育園児の保護者に対するアンケート調査によると、高齢者との交流による影響として、「年長者を敬う態度が身につく」、「昔の話や遊びの伝承」といった肯定的な意見が92%であった<sup>3)</sup>。また、交流頻度と内容の希望として、日常的な交流と行事での交流を合わせると46%であった<sup>3)</sup>。

高齢者へのアンケートでは、交流頻度に関して毎回交流や行事の充実を選択し、いまよりも多く子どもと関わりたいという意向を有していたのは48%であった<sup>3)</sup>。また、子どもとの交流形態の希望については、施設が設定した活動と一緒にを行う参加型の交流が52%で最も割合が高いものの、子どもが自然に周りにいるだけでよいという高齢者も43%いた<sup>3)</sup>。

介護職員の意見として、「保育園とデイサービスが併設という特色が生かせたら良いと思う」という記述もみられる一方で、日常的な交流活動を望む職員はいない。その理由としては、施設間の時間の調整の難しさや人手不足・多忙があげられていた<sup>3)</sup>。

### 4. 実践研究からみる高齢者と子どもの交流の実態

#### 1) 高齢者と子どもの交流における対象について

高齢者と子どもの交流は、地域における交流と施設における交流の二つに分類することができた。地域の高齢者と小中学生または幼児との交流が4件あった<sup>15, 16, 19, 20)</sup>。地域においては、65歳以上、独居等他者との交流が少ない、軽度認知症、本プログラムに興味があるものと小中学生の交流が1件あった<sup>14)</sup>。施設における交流においては、地域の施設入所要介護高齢者と小学生の交流が1件あった<sup>22)</sup>。また、重症認知症の高齢者がデイケアで、交流するものもあった<sup>13)</sup>。そし

て、保育所や幼稚園が併設されている老人福祉施設のデイサービスに通所する高齢者と小中学生または保育園児や幼児との交流が1件あった<sup>17, 18, 21)</sup>。

地域においては、高齢者と子どもの交流には大学生ボランティアや親世代、前期高齢者のスタッフ、NPOの存在もあった<sup>14, 15, 20)</sup>。また、看護系大学の教員が関わっている場合もあった<sup>14)</sup>。施設においては、高齢者福祉施設の介護士や保育園の保育士、幼稚園の教員、小中学高校の教員が高齢者と子どもの交流に関わっていた<sup>17, 18, 21, 22)</sup>。

## 2) 高齢者と子どもの交流内容について

地域においては、かるた、ちぎり絵等の共同制作、コミュニケーション促進ゲーム、世代間交流書道等の交流があった<sup>14)</sup>。また、高齢者と子どもが共に可能な運動（遊戯的運動、リズム体操、玉入れ）を通じた交流もあった<sup>23)</sup>。そして、ひまわりくらぶ、まち探検くらぶ、映像くらぶなど地域のくらぶ活動での交流<sup>15)</sup>や高齢者と小学生がグループになって地域の遺産を再確認することでまちづくり活動へのきっかけにしている交流もあった<sup>20)</sup>。高齢者が小学校、幼稚園、児童館などで読み聞かせをおこない、高齢者による社会活動を目的とした交流もあった<sup>19)</sup>。小学生や中学生が高齢者の体力測定や身体機能検査の測定を担当し、その関わりを通して交流を図るというものもあった<sup>16)</sup>。

老人福祉施設においては、複合施設でないところでは、しりとり、塗り絵、ゲームなどを通じた交流があった<sup>13)</sup>。また、小学生が歌や笛の演奏を披露し、その後握手をしてコミュニケーションをとるという交流もあった<sup>22)</sup>。複合施設においては、歌や手遊び、ゲーム、パズル、折り紙などの遊びを通しての交流があった<sup>17, 21)</sup>。また、月ごと季節を考慮した行事<sup>17, 21)</sup>やその行事に伴う準備（七夕の笹づくりなど<sup>17)</sup>、月に1回のお誕生日会<sup>21)</sup>もあった。年に数回行われている交流（歌、太鼓、ゲーム）もあった<sup>18)</sup>。さらに、一人暮らしの高齢者宅への訪問や高齢者と一緒に作業を行ったり、グループホーム訪問という交流もあった<sup>18)</sup>。複合施設においては、毎日午前中30～40分程度一緒に遊ぶという日課があった<sup>18, 21)</sup>。

## 3) 文献からみる高齢者と子どもの交流についての効果

地域においては、かるた、ちぎり絵等の共同制作、コミュニケーション促進ゲーム、書道等の交流が、高齢者の孤立を防ぎ、意味ある居場所となり、高齢者の心の健康に良い効果をもたらしていた<sup>14)</sup>。高齢者と小学生がグループになって地域の遺産を再確認することでまちづくり活動へのきっかけにしている交流については、子どもたちのまちへの関心を深めることができていた<sup>20)</sup>。また、子どもたちが大人と協力して、まちの遺産をきれいに变えたいと願う気持ちを高めており、互いに意見を出し、共感することで世代間交流を図ることができ、子どものまちに対する愛着心を高めることができていた<sup>20)</sup>。高齢者が小学校、幼稚園、児童館などで読み聞かせをおこない、高齢者による社会活動を目的とした交流においては、孫、近隣以外の子どもとの交流頻度、近隣以外の友人・知人の数が増加していた<sup>19)</sup>。また、高齢者は、サポートを受けるというよりも、サポートを提供するという意識が向上し、健康度自己評価と握力において優位な改善または低下の抑制がみられた<sup>19)</sup>。また、ひまわりくらぶ、まち探検くらぶ、映像くらぶなど地域のく

らぶ活動「での交流においては、子ども世代、親世代・祖父母世代と三世代にわたり継続的な活動のなかで世代や立場を超えて多様な交流が育っている<sup>15)</sup>。それは、大人が仕掛けたものであるが、子どもたちはのびのびと活動し、さまざまな人と自然な交流があり、信頼関係を築いている<sup>15)</sup>。そして、子どもたちは一度入会すると活動を継続しており、概ね満足し、積極的な意欲をもち続けていることから本活動で体験する世代間交流を肯定的にとらえている<sup>15)</sup>。それは、高齢者と子どもの交流ではあるが、企画運営するさまざまな異年齢の大人が周辺に存在するはずであり、子どもはそうした大人から様々なメッセージを受け取り、影響をうけている<sup>15)</sup>。

また、小学生が歌や笛の演奏を披露し、その後握手をしてコミュニケーションをとるという交流もあった<sup>22)</sup>。その高齢者の反応としては、日ごろみられない穏やかな笑顔が多くの人にみられており、外界からの社会交流が生きがいにつながる<sup>22)</sup>という報告があった。子どもにとっては、老人や障害を持った人との接し方が学べ、思いやりの心を育てることができる<sup>22)</sup>。

高齢者と子どもが共に可能な運動（遊戯的運動、リズム体操、玉入れ）を通じた交流もあった<sup>23)</sup>。高齢者・幼児とも単独で運動したときの心拍数より、共に行ったときの心拍数が上昇していた。また、小学生や中学生が高齢者の体力測定や身体機能検査の測定を担当し、その関わりを通して交流を図るという三世代交流プログラムもあったが、そのプログラムへの参加が子どもの共感性にどのような影響を及ぼすかという調査では、子どもの共感性の向上や変化はみられなかった<sup>16)</sup>。

複合施設においては、高齢者にとって、幼児との交流が楽しみになっていた<sup>17)</sup>。幼児においては、自分がいることを喜んでもらえたり、自分が役に立つ人間であることが実感できる体験であった<sup>18, 21)</sup>。また、高齢者の包容力によって、幼児はありのままを受け入れてもらえていると感じている<sup>21)</sup>。そして、高齢者と子どもの交流は、幼児にとって社会生活の身に体験の役割を担っている<sup>21)</sup>。さらに、高齢者の体験した過去の生活や知識や知恵など文化の伝承をうけている<sup>21)</sup>。小学生は、自分たちにできることをもっと担いたいと自主的に交流を計画し実践していた<sup>18)</sup>。中学生になると、高齢社会が抱えるさまざまな問題へ目が向くようになった<sup>18)</sup>。幼児の保護者からは、複合施設における交流について、「他者への思いやり」、「コミュニケーションスキルの発達につながる」という意見があった<sup>17)</sup>。複合施設ではない老人福祉施設では、しりとり、塗り絵、ゲームなどを通じた交流があった<sup>13)</sup>。そこでは、両者があってから4時間の間は徐々に子どもの心拍数が減少する傾向がみられた<sup>13)</sup>。

## 考 察

### 1. 高齢者と子どもの日常交流の現状とあり方

#### 1) 高齢者と子どもから見る日常交流の現状とあり方

日常交流とは、特別なことではなく、食事をする、おやつを食べる、遊ぶ、話をする、寝転ぶ、テレビを一緒にみるなど日々、生活の中でしているようなことをしながら高齢者と子どもが

時間と場を共有し、くつろげるような交流のことをいう。

幼稚園・保育園へのアンケートによると、そこに通園している幼児の8割が祖父母に好感をもっており、「遊んでくれたり、お菓子を買ってくれたり、抱っこしてくれてうれしかった」ことを理由にしていた<sup>11)</sup>。また、8割の幼児が祖父母と「一緒に遊びたい」「ご飯を食べたい、泊まりたい、お風呂に入りたいなど一緒に過ごしたい」とのぞんでいた<sup>11)</sup>。幼児にとっては、遊びやおやつ、抱っこなどが祖父母へ好感をもっていた理由であり、食事、睡眠、入浴といった日常生活での交流を望んでいた。つまり、それは日常生活を共にするということであり、日常交流を希望しているということであると言える。そして、幼児と地域の高齢者との交流には8割以上の親の賛同があるということからも、今後、現在よりも日常交流を促進していける可能性がある。

小学生においては、物理的な距離が高齢者との接触頻度を大きく規定する<sup>2)</sup>。そして、接触回数は距離が近いほど多く行われていた<sup>2)</sup>。また、会話の多様性および接触回数が共感性に与える効果が明らかであり、小学生の主観的親密感が共感性に効果を持つという<sup>2)</sup>。つまり、高齢者とのコミュニケーションを通じて、小学生の共感性の発達が促進される。そのためには、両者が交流する場所と十分な時間が確保され、その中でコミュニケーションを通じた交流をすることが必要であり、継続的で、自然にコミュニケーションが楽しめる交流の在り方が有効である<sup>2)</sup>。

高齢者においては、他世代との交流頻度の高い人ほど自世代にとっても他世代にとっても有益だと評価している<sup>4)</sup>。そして、他世代への貢献よりもむしろ自らに還元されるものがあると感じている<sup>4)</sup>。また、身体的接触をとまなう交流が多く行われる可能性の高い保育的ボランティアが、高齢者の生きがい対策としての有益なプログラムになる可能性を示唆している<sup>1)</sup>ということから接触する機会が多い日常交流には高齢者にとっても意義があると言える。

## 2) 地域における日常交流のあり方

地域における交流には、かるた、ちぎり絵等の共同制作、コミュニケーション促進ゲーム、世代間交流書道等の交流<sup>14)</sup>や、運動を通じた交流もあった<sup>23)</sup>。また、まちのクラブ活動を通しての交流<sup>15)</sup>や高齢者と子どもによる地域の遺産を再確認することでまちづくり活動へのきっかけにしている交流もあった<sup>20)</sup>。読み聞かせボランティアによる高齢者の社会活動を目的とした交流もあった<sup>19)</sup>。小中学生が高齢者の体力測定や身体機能検査を担当し、交流を図るというものもあった<sup>16)</sup>。そのような地域における交流における交流の大きい特徴として、高齢者と子どもの交流を支える大学生ボランティアや親世代、前期高齢者のスタッフ、NPOの存在がある<sup>14, 15, 20)</sup>。看護系大学の教員が、地域のそのような交流に関わっている場合もあった<sup>14)</sup>。子どもはそうした大人からさまざまなメッセージを受け取り、影響をうけている<sup>15)</sup>。すなわちそこでは「意図しない交流が行われている」のであり、それは子どもの成長に「意図した交流」よりも大きな影響を与える場合もある<sup>15)</sup>。さまざまな人を高齢者と子どもの交流に巻き込み、その地域の特性を生かした交流をすることが必要である。高齢者への調査によると、永住意識の高い保護者や高齢者は、子どもと高齢者のふれあいに積極的であるという<sup>12)</sup>。また、その調査対象の地域では、小学生の50%が児童館に通っていること、高齢者の10~25%が老人クラブに会員として参加している報告

もある<sup>12)</sup>ことから、住みやすい街づくりや交流の場としての施設の再整備も高齢者と子どもの交流には重要な要素の一つである。交流の場があれば、伝承遊び<sup>11)</sup>や玩具作り<sup>11)</sup>、地域歴史の学習<sup>11)</sup>なども可能である。高齢者の生きてきた歴史を聴くことも子どもたちにとっては大切な人生に対する学びでもあり、高齢者も人生を振り返ることにより、自らの自尊心の向上につながる。つまり、地域における日常交流は、高齢者と子ども、そして彼らを取り巻く人の関わりと街づくり、交流の場が重要なのである。

### 3) 施設における交流のあり方

幼稚園・保育所への質問紙調査によると、幼児たちが高齢者と触れ合う機会の頻度は、1～2回から数回という回答が多く、約75%を占めていた<sup>6)</sup>。ふれあいは、幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が観賞するという形態がもっとも多く、ついで、幼児たちが訪ねてきた高齢者と一緒に遊ぶという形態が多かった<sup>6)</sup>。交流に対する幼児の反応については、「普段よりうれしそうである」という回答がもっとも多く、ついで、「普段よりはしゃいでいる」、「緊張しているように見える」という回答が多かった<sup>6)</sup>。1～2回から数回という高齢者と子どもの交流においても保育士がとらえた子どもの反応は肯定的であった。

高齢者への調査では、交流頻度に関して毎回交流や行事の充実を選択し、今よりも多く子どもと関わりたいという意向を有していたのは48%であった<sup>3)</sup>。また、子どもとの交流形態の希望については、施設が設定した活動と一緒に参加型の交流が52%で最も割合が高いものの、子どもが自然に周りにいるだけでよいという人も43%いた<sup>3)</sup>。つまり、子どもが自然に周りにいるということが日常交流であり、それを高齢者が希望している。複合施設においては、お互いが自分の居場所とそこにいるべきメンバーを認識している会話がされていた<sup>5)</sup>ことから複合施設においては日常交流が可能であるといえる。そして、そのような交流をするためには、高齢者と子どもの固定化したメンバーの関わりが、自然な関係性、さらにお互いを理解して思いやるような関係性を構築する<sup>5)</sup>ことが重要である。交流の内容としては、高齢者と子どもの関係性が構築されやすく、双方に効果的な交流は、日常的な生活交流がよい<sup>5)</sup>ことやすべての時間・行動を共有するのではなく、生活の一部をともにすることによって高齢者と子どもの良好で持続的な関係性が構築される<sup>5)</sup>という報告がある。また、複合施設の保育士からは、幼児と高齢者双方に意義のある活動にすべきである、自然な形でふれあいが望ましい、イベント的は活動ではなく、継続することが大切であるなどの意見があった<sup>6)</sup>。それらのことから高齢者と子どもにとっては日常交流が望ましいのである。幼児の保護者に対するアンケートにおいても「年長者を敬う態度が身につく」、「昔の話や遊びの伝承」といった肯定的な意見が92%であり、交流頻度と内容の希望として、日常的な交流と行事での交流を合わせると46%であった<sup>3)</sup>ことから日常交流に対する保護者の期待も高いといえる。

複合施設においては、歌や手遊び、ゲーム、パズル、折り紙などの遊びを通しての交流や<sup>17, 21)</sup>月ごと季節を考慮した行事<sup>17, 21)</sup>、その行事に伴う準備（七夕の笹づくりなど<sup>17)</sup>、月に1回のお誕生日会<sup>21)</sup>も、年に数回行われている交流（歌、太鼓、ゲーム）もあった<sup>18)</sup>。さらに、毎

日午前中 30～40 分程度一緒に遊ぶという日課があった<sup>18, 21)</sup>。つまり、日常的に高齢者と子どもが交流のある複合施設においてはさまざまな交流が企画されている。それらのことが高齢者にとっては、幼児との交流が楽しみになっていた<sup>17)</sup>。幼児においては、自分がいることを喜んでもらえたり、自分が役にたつ人間であることが実感できる体験であった<sup>18, 21)</sup>。また、高齢者の包容力によって、幼児がありのままを受け入れてもらえていると感じている<sup>21)</sup>。そして、高齢者と子どもの交流は、幼児にとって社会生活のミニ体験の役割を担い、高齢者の体験した過去の生活や知識や知恵など文化の伝承をうけている<sup>21)</sup>。また、環境面においては、合築のほうが、日常交流を行いやすく、さらに、合築の中でも小規模施設にみられる一体型は、高齢者と子どもが行き来しやすく、自然な交流がうながされるという報告がある<sup>5)</sup>。それらのことから、複合施設においては、日常交流を促進しやすい環境にあり、高齢者と子ども双方にとってこのような交流は有効であるといえる。

## 2. 高齢者と子どもの日常交流促進にむけての課題

施設における高齢者と子どもの日常交流は、双方にとって利点も多く重要であり、今後、促進していく必要がある。そのために、以下の課題が明らかになった。

### 1) 地域における高齢者と子どもの日常交流促進に向けての課題

#### (1) 交流プログラムへの配慮

運動プログラムなどは高齢者と子どもに体力の差があることなどから十分な配慮が必要である。高齢者と幼児とのふれあいのもとでできる限り両者が安全で、各々の体力的にみて可能な、遊戯的運動やリズム体操、玉入れ等の運動プログラムにより両者がふれあいのもとで運動した場合の心拍数は高齢者・幼児とも単独で行ったときの心拍数に比べて上昇していた<sup>23)</sup>。それは、高齢者と子どもの相互作用によるものであると考えられるが、双方の健康管理は重要である。このことから高齢者と幼児のふれあいのもとでの運動プログラムは、高齢者の安全性やその体力等を考慮して、高齢者を中心に考える必要がある<sup>23)</sup>。

#### (2) 高齢者と子どもの交流における継続性

地域での活動を通じた交流においては、継続することが重要である。まちづくりへのきっかけとしてまちの遺産を活用して、高齢者と子どもの交流を図る活動は、高齢者と子どもの交流のためにも、ひいては、まちの活性化のためにも継続的に行う必要がある<sup>20)</sup>。そのため、今後は行政・学校・NPO の三者がまちづくりという同じ目的に向かい協働することで、単発的ではない、継続的で進歩のあるまちづくりが必要である<sup>20)</sup>。

看護系大学では、小中学生と高齢者世代の交流活動を通じ、参加者が知恵や文化等を相互に支えあうことによる高齢者のヘルスプロモーションと小中学生の高齢者理解の促進を目的としたプログラムの実践が行われていた<sup>14)</sup>。今後も、世代間交流による効果を活用した、地域において持続可能なヘルスプロモーション看護支援を検討することが課題である<sup>14)</sup>。

### (3) サポート・ネットワークの充実

地域で、交流を続けていくためには、サポート・ネットワークが大切である。読み聞かせのボランティアを行っている高齢者には日常、家事や家族の介護に忙しい者が多いため、ボランティア仲間に対して、「仲間へのサポートは厭わないが、自分がサポートを受けることにより、迷惑をかけたくない」というサポートの受領に対する遠慮や罪悪感が表出した可能性がある<sup>19)</sup>。短期間の交際ではボランティア間で対等に安心感や信頼感を共有するには至っていないのかもしれない<sup>19)</sup>。今後、ボランティアの自主運営にあたって、ボランティア間のサポート・ネットワークの充実は必須である<sup>19)</sup>。

以上のことから地域における高齢者と子どもの日常交流促進に向けての課題について、(1) 交流プログラムへの配慮、(2) 高齢者と子どもの交流における継続性、(3) サポート・ネットワークの充実の3点があげられた。なかでも高齢者のヘルスプロモーションと小中学生の高齢者理解の促進は、今後もさらに深刻になるであろう少子高齢社会にとっては重要な意味をもつ。実践研究において、看護系大学が拠点となってそれらを目的とした活動を実践していた。それも地域での高齢者と子どもの日常交流促進のためには、重要であるが、必ずしも大学がそれぞれの地域にあるとはかぎらないため、今後は、積極的に出向いて、その地域の特性を生かした高齢者と子どもの交流を通して、高齢者のヘルスプロモーションや小中学生の高齢者理解の促進をしていく必要がある。

## 2) 施設における高齢者と子どもの交流についての課題

### (1) 施設職員の疾患・障害をもつ高齢者の理解

高齢者によっては子どもとの交流が苦手<sup>17)</sup>である人や、子どもが苦手だという人もいる<sup>3, 26)</sup>。高齢者は、人生を重ねていくうえでさまざまな出来事に出会い、経験を積み重ねて個人の価値観や生活習慣が形成されていく。そのため、高齢者においてはとくに個人差が大きく、それぞれの個別性を尊重して関わるのが重要である。それは、子どもとの交流においてもいえることであり、それぞれの高齢者の希望に配慮する必要がある。また、交流の場が幼稚園や保育所という子どもの居場所での交流は、高齢者の主体性がなくなる<sup>5)</sup>という報告がある。高齢者ができるだけ自分の意思によって生活のありようを決定する自由を確保することは、高齢者の生活の質を維持するうえで重要な要素である<sup>27)</sup>。そのため、子どもとの交流においても、高齢者が主体的に自らの意思によって行動できるようにすることが大切であると考ええる。

高齢者は、加齢に伴う身体的変化や精神的な変化を生じやすい。また、疾患・障害により、日常生活に何らかの支障をきたす場合が多い。そのため、共同作業を行う交流では参加高齢者が限定されたり<sup>5)</sup>、子どもと触れ合いを望んでいても手遊びなど一緒にやる場面で交流できない高齢者を気遣う意見もあった<sup>24)</sup>。また、施設の経過年数とともに利用者の自立度が低下し、認知症の症状を伴う利用者が増える傾向にあり、体力的な負担を強いることになり、そのことが介護を担う職員の負担につながるという問題があった<sup>25)</sup>。以上のことから、高齢者一人一人の加齢に伴う

変化や疾患・障害について十分に把握し、その状況に合わせた交流を行う必要がある。

学校担任は、認知症高齢者の心ない言葉や暴力等に児童が傷つく可能性があることを心配していた<sup>22)</sup>。また、子どもの保護者へのアンケートにおいて、高齢者の健康や認知症のことを心配する意見が出されている<sup>3)</sup>。さらに、保護者の意見の中には、「高齢者の事情や差異を汚いとか臭いとか否定的に取られてしまう場合もある」という子どもの否定的な高齢者観を心配する意見があった<sup>3)</sup>。都市化、核家族化は、1980年代の高度成長期時代に急速に加速しており、保護者も施設の職員も核家族の中で育っている可能性がある。そのため、高齢者との交流が少なく、高齢者の理解には時間がかかる可能性がある。保育士へのアンケートにおいて、「交流を持たせてあげたいと思うが利用者とのように接してよいのかわからない」という職員自身の不安があった<sup>3)</sup>ことから職員や保護者における高齢者の特徴の理解が必要であるといえる。

子どもの周りの親や保育士の高齢者への距離が子どもと高齢者の距離に影響している<sup>9)</sup>という報告もあることから、高齢者の特徴を理解したうえで職員がかかわるということは子どもに対する高齢者への接し方の重要なモデルという存在になるといえる。

## (2) 施設職員における子どもの特性についての理解

子どもの年齢が低いと共同作業は不可能であるという報告がある<sup>5)</sup>。また、実際に、高齢者との交流時間が就寝まえだと活動を楽しんだ後で、興奮して寝付きが悪い時があるという子どもの日常生活における変化を心配する声も聞かれた<sup>9)</sup>。それらについては、年齢や子どもの生活リズムに合わせた交流プログラムを考慮する必要がある。

子どもは外見で人を判断し、恐怖心を感じることもあるということもある<sup>3, 25)</sup>という。また、職員の意見として、「突然大きな声を出して怒り始めたりする高齢者がいると高齢者に対してマイナスイメージにつながる」という意見もあった<sup>24)</sup>。しかし、子どもにとっては幼少期からさまざまな人との交流は、必要である。常に障害を持つ人も一緒にいるという環境は、障害を特別視するのではなく、共に社会で生きることが普通なのだというノーマライゼーションの考え方が形成される礎ともなるのではないかと期待される<sup>21)</sup>。また、高齢者との日常的な交流は他者への思いやり、コミュニケーションスキルの発達に寄与している<sup>17)</sup>。これらのことから、子どもたちにとって、高齢者との交流は教育的意義のほうが大きいのである。

## (3) 高齢者と子どもの交流にあたっての配慮

複合施設ではない老人福祉施設において、高齢者と子どもの交流が高齢者と出会う前と出会ってから1時間毎の心拍数の経時的変化の平均について、出会ってから4時間は徐所に心拍数が減少していた<sup>2)</sup>。それは本人の状況や精神面でのリラックスした状態が考えられる<sup>2)</sup>。通常、高齢者施設への訪問等は、1～2時間程度の短期間であることがほとんどであるようだが、今回の結果からはそれ以上の時間を一緒に過ごすことで、子どもが初めての状況に慣れる時間を含んだ訪問も検討の余地がある<sup>2)</sup>。

また、同じく複合施設ではない老人福祉施設での交流においては、学校担任によると、認知症高齢者の心ない言葉や暴力等に児童が傷つく可能性があるという報告がある<sup>22)</sup>。そして、高齢者

と子どもの交流においては、高齢者は一般に免疫力が低下しており感染症（インフルエンザ等）対策が問題となっていた<sup>22)</sup>。

それ以外にも幼児・高齢者ともに互いに相手に馴染めない人もおり、実践する際のむずかしさについても意見があった<sup>6)</sup>。また、高齢者の健康面についても憂慮する意見があり、幼児・高齢者双方に怪我があってもいけないという心配も述べられていた<sup>6)</sup>。

#### (4) 職員の負担への配慮

保育所において高齢者と子どもが日常的に接触して交流するのは約30%であった<sup>7)</sup>。高齢者とのふれあいの今後について、現在のままでよいと回答した幼稚園・保育所の理由は、「仕事が多くこれ以上の調整は無理で、職員の負担が大きすぎる」というものであった<sup>6)</sup>。また、触れ合う機会がないと回答した幼稚園と保育所の理由にも「職員の負担が大きいため」という意見があった<sup>6)</sup>。複合施設の介護職員に対する調査においても、「保育園とデイサービスが併設という特色が生かせたら良いと思う」という記述もみられる一方で、日常的な交流活動を望む職員はいないという<sup>3)</sup>。その理由として、施設間の時間の調整の難しさや人手不足・多忙があげられる<sup>3)</sup>。また、高齢者と子どもの交流が「担当職員の負担」であるという意見もある<sup>18)</sup>。教職員には、高齢者と子どもの交流に熱意があるものの、通常の業務や異動による活動の中断される場合がある<sup>18)</sup>ことも指摘されている。活動主体間の格差や担当者の負担が大きく、情報提供や研修の機会が不十分といった状況が指摘されており、早急に改善していかなければならない<sup>18)</sup>。

ほとんどの保育士が就任当時、怖さや壁を感じていたが、日が経つにつれて、自然に受け入れられるようになっていく<sup>9)</sup>。保育士の高齢者に対する思いの変容要因として、①施設での研修、②施設長の話、③サポート的な環境、④先輩の言動、⑤他職員からの触発、⑥シェアリング・相互作用、⑦関わりの回数があった<sup>9)</sup>。交流を継続していくためには、職員に対する研修や相談体制が大切である。また、子どもの周りの親や保育士の高齢者への距離が、子どもと高齢者の距離に影響している<sup>9)</sup>ことからそれらのことが重要である。

#### (5) 職員の専門性を生かした連携と協働

人員不足やそのために他職種との時間の調整が困難であることが挙げられている<sup>3, 25)</sup>。このことから、専門外の相手側への迷惑や負担を心配しているという結果もある<sup>3)</sup>。現在、高齢者と子どものケアにかかわる人材は、それぞれ独立の専門課程で養成されており、介護士は子どもへの、保育士は高齢者への対応に関するスキルや知識に乏しく<sup>5, 26)</sup>、そのことにより、スタッフによるずれ違いが生じていることが指摘されている<sup>5)</sup>。高齢者と子どもの理解については前述しているが、それぞれが高齢者と子どもに関する理解を深める必要もある。また、高齢者と子どもの交流においては、高齢者は一般に免疫力が低下しており感染症（インフルエンザ等）対策が問題となっていた<sup>22, 24)</sup>。施設では、インフルエンザの流行期間は交流をもたない<sup>22)</sup>という対策をとっているところもある。感染については、3歳以下は免疫も弱く、感染予防を考慮して、交流時期、時間、交流に慎重になる必要がある。しかし免疫学的には、5歳以上になると感染に対する抵抗力ができる<sup>27)</sup>ため、そのことをふまえて交流を検討することが大切である。これらのことが

らも職員における感染症に関する知識とその対策についての共通認識は重要である。

職員がお互いの職業の専門性を重視し、情報交換や話し合いの機会は、高齢者と子どもの交流において欠かせないといえる。また、職員が自らの専門性を生かした交流の企画は、高齢者と子どもの特徴を生かしたものとなり、それにより高齢者と子どもにもいい変化があらわれ、それがさらなる職員のモチベーションにつながる。

以上、施設における高齢者と子どもの交流についての課題として、①施設職員の疾患・障害をもつ高齢者の理解、②施設職員における子どもの特性についての理解、③高齢者と子どもの交流にあたっての配慮、④職員の負担への配慮、⑤職員の専門性を生かした連携と協働の5点があげられた。これらのことから、高齢者と子どもの日常交流が円滑に行われるためには、高齢者や子どもの理解はもちろんのこと、それぞれの日常生活の特徴を把握し、それを生かした日常生活援助ができる者の存在が重要である。また、高齢者と子どもの日常交流がさかんに行われるためには、施設間や他職種間の連携が必要不可欠となるため、コミュニケーション能力や調整能力を兼ね備えたコーディネーター的な役割の職種が必要である。

つまり、高齢者と子どもの日常交流における実践者としては、①衛生に関する知識と感染などの予防に対するスキルがあること、②高齢者と子どもの特徴に関する理解、③高齢者や子ども、他職種とのコミュニケーション能力、④他職種との調整能力が必要であり、高齢者と子どもの交流においての他職種の中には、それらの能力を兼ね備えた看護職も重要であると考えられる。

## ま と め

1. 文献は、CiNii と医学中央雑誌（いずれも 2001–2011 年）を用い、「高齢者」「子ども」「幼児」「幼老共生」「交流」「世代間交流」「ふれあい」「施設」をキーワードとして検索した結果、33 件の対象文献があった。
2. 日常的に高齢者と子どもが交流のある複合施設においては、日常交流に近い交流が行われている。
3. 交流における高齢者、子どもの反応はよく、8 割以上の保護者の賛同もあった。  
高齢者と子ども、双方に効果的な交流は、日常的な生活交流であり、生活の一部をともにすることによって高齢者と子どもの良好で持続的な関係性が構築される。
4. 高齢者と子どもの日常交流を促進するための課題として、地域においては、1) 交流プログラムへの配慮 2) 高齢者と子どもの交流における継続性 3) サポート・ネットワークの充実があった。また、施設においては、1) 疾患・障害をもつ高齢者の理解 2) 子どもの理解 3) 高齢者と子どもへの配慮 4) 職員の負担 5) 職員の専門性を生かした連携と協働がある。
5. 高齢者と子どもの日常交流を促進するための課題から見えてくるものとしては、1) 高齢者と子どもの日常交流が円滑に行われるためには、高齢者や子どもの特徴の理解と、それを

生かした日常生活援助ができる者の存在が重要である。2) 高齢者と子どもの日常交流がさかんに行われるためには、施設間や他職種間の連携が必要不可欠となるため、コミュニケーション能力や調整能力を兼ね備えたコーディネーター的な役割の職種が必要である。

6. 高齢者と子どもの日常交流における支援者として、看護職も重要である。

#### 引用文献

- 1) 君島奈奈：地域環境を支える人材としての高齢者の可能性：高齢者の児童との世代間交流の日常的な多寡が高齢者の地域における保育的ボランティアの引き受け意向に及ぼす影響，大正大学研究紀要人間学部・文学部，95，2010.
- 2) 村山陽：高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 交流が子どもに及ぼす影響，社会心理学研究，25(1)，1-10，2009.
- 3) 下村美保、下村一彦：少子高齢社会における世代間交流の意義と課題：その2 幼老合築型施設‘みどの福祉会’のアンケート調査を通して，山形短期大学紀要，41，179-193，2009.
- 4) 日下菜穂子：超高齢時代における世代間交流の意義 - 関西学研都市高齢者の世代間交流に関する調査から -，同志社女子大学学術研究年報，59，69-78，2008.
- 5) 立松麻衣子：高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策：高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究，日本家政学会誌，59(7)，503-515，2008.
- 6) 關戸啓子：全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者のふれあいに関する実態調査，川崎医療福祉学会誌，15(2)，655-663，2006.
- 7) 土永典明、岡崎利治：世代間交流に関する調査研究 - 高齢者福祉関係施設を併設している保育所の側面から -，九州保健福祉大学研究紀要，6，27-34，2005.
- 8) 川出富貴子、鍵小野美和、他：子どもにとっての老人の役割子どもと老人のふれあいに関わる保育士のグループインタビュー分析から，愛知医科大学看護学部紀要，3，33-40，2004.
- 9) 川出富貴子、鍵小野美和、他：子どもと老人ふれあいに場面創出過程における老人に対する保育士の思いの変容と園児の反応および変容要因，愛知医科大学看護学部紀要，2，23-30，2003.
- 10) 關戸啓子：高齢者とのふれあいに幼稚園・保育所が抱く幼児の将来への期待：全国の幼稚園・保育所へのアンケート調査結果より，川崎医療福祉学会誌，13(1)，195-201，2003.
- 11) 日出幸昌江、天富美彌子：子育てにおける祖父母世代の参加：幼老共生の暮らしに向けての考察，大阪教育大学紀要Ⅱ社会科学・生活科学，51(2)，139-152，2003.
- 12) 齊藤徹、黒澤和隆：子どもと高齢者の交流に関する意識調査，日本建築学会技術報告集，(14)，229-232，2001.
- 13) 江渡文、大島美沙、他：子どもと要介護高齢者との交流が心臓自律神経活動に及ぼす影響 - アクティブトレイサーを用いて，医学と生物学，155(6)，390-395，2011.
- 14) 亀井智子、糸井和佳、他：都市部多世代交流型デイプログラム参加者の12か月間の効果に関する縦断的検証：Mixed methodsによる高齢者の心の健康と世代間交流の変化に焦点を当てて，日本老年看護学会誌，14(1)，16-24，2010.
- 15) 秋山展子、天野寛子：世田谷区船橋地域「子どもぶんか村」の活動を通してみる世代間交流：子どもの側からみる大人との交流，學苑，820，15-21，2009.
- 16) 日比野由利、中村裕之：子どもの共感性と三世代交流プログラムによる変化，思春期学，26(4)，2008.
- 17) 上村眞生、岡林祈一郎、他：世代間交流が幼児・高齢者に及ぼす影響に関する実証的研究，幼年教育研究年報，29，65-71，2007.
- 18) 田中慶子、角間陽子、他：超高齢社会における世代間交流の在り方：長野市鬼無里地域での実践を通して，信州大学教育学部紀要，119，147-156，2007.
- 19) 藤原佳典、渡辺直紀、他：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“RE-

- PRINTS”の一年間の歩みと短期的効果, 日本公衆衛生雑誌, 56(9), 702-714, 2006.
- 20) 山口友佳: 歴史都市, 津島に残る古井戸を活用した子どもと高齢者の交流を促すまちづくり (「住まい・まち学習」実践報告・論文) - (地域の学びづくりの取り組みから), 「住まい・まち学習」実践報告・論文集, (3), 75-80, 2002.
  - 21) 關戸啓子: 複合型施設における高齢者とのふれあいが幼児にもたらす教育的意義, 日本家政学会誌, 53(7), 649-657, 2002.
  - 22) 三宅康弘、武田則昭、他: 施設入所要介護高齢者と小学校児童の交流会に関する検討, 四国公衆衛生学会雑誌, 46(1), 98-103, 2001.
  - 23) 笹島浩子、他: 体験学習が他者理解に及ぼす効果 - 高齢者疑似体験及び世代間交流の効果 -, 富山大学教育学部研究論集, 2, 43-52, 1999.
  - 24) 土井晶子、他: 高齢者施設におけるレクリエーション活動の一環としての高齢者と子どもの世代間交流の効果とその可能性についての考察, 研究紀要, (3), 25-42, 2009.
  - 25) 北村安樹子: MONTHLY REPORT 幼老複合施設における異世代交流の取り組み (2) 通所介護施設と保育園の複合事例を中心に, ライフデザインレポート (153), 4-15, 2003.
  - 26) 中西睦子監修: 老人看護学, 建帛社, 24, 2001.
  - 27) 筒井真優美編: 小児看護学子どもと家族の示す行動への判断とケア第5版, 46-47, 日経研, 2007.

---

〔はやしたに ひろみ 老熟看護学専攻〕

〔ほんじょう みか 小児看護学専攻〕